

## ブロイラーの産肉検定

小野晴美・石山英光・西尾祐介（福岡県農業総合試験場）

Harumi Ono, Hidemitsu Ishiyama and Yusuke Nishio :  
Performance Test of Meat Production on Broiler

ブロイラーの産肉性能とその特徴を把握することは、生産農家のみならず雛を供給する孵化場にとっても最大の関心事であることから、当場では数年間隔でブロイラーの産肉能力経済検定を実施しているが、本検定は県内孵化場より提供された銘柄別の種卵を場内で孵化し、それらの雛を同一条件で飼育して、産肉性能を調査するものである。

本報では、1989年の結果及び過去の検定結果との比較による産肉能力の改良度合について報告する。

## 1. 検定方法

1) 供試鶏 外国鶏のアーバーエーカー・ハバード・チャンキー・コップの4銘柄で、参考として国産鶏のノーリン502の計5銘柄を用いた。

2) 検定期間 1989年10月19日～12月21日の63日間とした。

3) 検定羽数 各銘柄とも雌雄各70羽とし、2反復を設定した。

4) 試験鶏舎 開放式平飼い鶏舎を用い、飼育密度は3.3m<sup>2</sup>当たり雄36羽、雌41羽で、雄雌別に収容した。

5) 供試飼料 市販配合飼料（前期用は、CP 23%・ME 3000 Kcal / Kg, 後期用及び仕上げ用はCP 18%・ME 3170 Kcal / Kg）を不断給与した。

## 2. 結果及び考察

成績は、全項目とも雌雄平均値で示した。

## 1) 1989年度検定成績

第1表に示すとおりである。

(1) 生体重 4週齢までは銘柄間に差はみられなかったが、その後は週間の増体重に差が生じ、9週齢体重はコップが最も重かった。

(2) 育成成績 生体重・増体重・飼料消費量の各項目とも、コップが最も大きく、次いでチャンキー>アーバーエーカー>ハバード>ノーリン502の順であった。また、飼料要求率は、コップ及びアーバーエーカーが2.23と、他の銘柄より小さい値であった。

(3) 解体成績 正肉歩留まりはコップ及びチャンキーが各々42.4%・42.3%と高かったが、他の銘柄間には差がなかった。また、現在

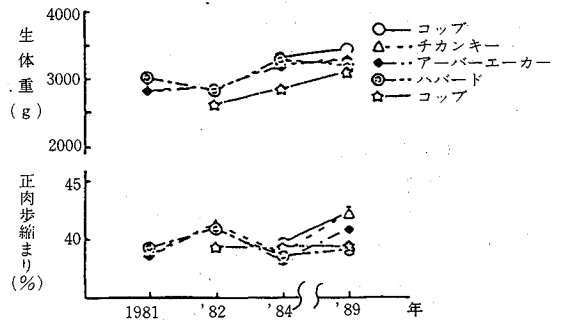
問題となっている腹腔脂肪付着率は、ノーリン502が3.0%で最も少なかった。

## 2) 1981年以降の年次変化

生体重及び正肉歩留まりは、第1図に示すとおり、各検定銘柄とも年々改良され、特にノーリン502の生体重は年次における高低の変化がなく、直線的な増加を示した。しかし、外国鶏の1年当たりの生体重増加量は、4銘柄の平均値で1984年までが約90gであったのに対し、1985年以後は約30gとなっており、生体重に関して改良量の低下が認められた。

## 3. まとめ

今回の検定では、外国鶏の間に大きな差はなかったが、コップは生体重が重く、チャンキーは育成率が高いという特徴が認められ、国産鶏のノーリン502は、生体重は外国鶏より劣るものの、その差は年々小さくなっており、腹腔内脂肪が少ないという特徴を備えている。また、生体重の改良度合は鈍化傾向にあると判断された。



第1図 生体重及び正肉歩留まりの年次変化

第1表 育成成績及び解体成績

銘柄	育成率 (%)	生体重 (g)		増体重 (g)	飼料量 (g)		飼料要求率 (②/①)	屠体重 (g)	正肉 <sup>1)</sup> 歩留 (%)	腹腔 <sup>2)</sup> 脂肪 (%)
		4週齢	9週齢		①	②				
ノーリン503	95.4	1,031	3,098	3,057	7,091	2.30	2,952	39.5	3.0	
アーバーエーカー	94.2	1,039	3,278	3,240	7,236	2.23	3,094	40.9	4.1	
チャンキー	97.9	1,047	3,306	3,265	7,527	2.31	3,190	42.3	4.2	
ハバード	95.4	1,015	3,201	3,165	7,151	2.26	3,066	39.2	3.8	
コップ	94.3	1,030	3,432	3,393	7,572	2.23	3,223	42.4	3.5	

注) 1. 解体成績は雌雄各5羽の平均値。表の1)・2)は屠体重に対する比率。  
2. 育成成績は0～9週齢、解体成績は9週齢の成績。